

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006年度～2009年度

課題番号：18520282

研究課題名（和文） 日本・イギリス・フランスにおける絵本の国際比較研究

研究課題名（英文） Cross-national research into picture book in Japan, Britain, France

研究代表者 加藤 康子 梅花女子大学・文化表現学部・教授 60299005

研究分野：文学（近代以前日本児童文学）

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：絵本、狐、イソップ寓話、児童文学、挿絵、伊曾保物語、ラ・フォンテーヌ、擬人化

1. 研究計画の概要

文字と絵で総合的に表現している絵本については、近年関心も高く、研究も進んできているが、各国の絵本について国際的視野からの比較研究は少ない。そこで、日本・イギリス・フランスの絵本について研究を進めている3人が、狐が出てくるイソップ絵本という共通視点をめぐって共同研究を行い、資料収集、比較分析、考察を進めて、3カ国の絵本の特徴を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

イソップ寓話の伝播、その挿絵や絵本の系譜を資料に基づいて整理し、狐が出てくる話の中から5話を取り上げて比較し、共通点と時代や国や画家による相違点を分析した。その結果、日本では、二回のイソップ寓話の伝播が行われ、明治期にイギリスの出版書を典拠にしながら、日本風に手を入れている受容のあり方が見られること。イギリスでは、多様なテキストが次々に出版され続け、フランスや日本へも影響を与えていること。フランスではラ・フォンテーヌの文章に集約しながら美術の表現が多様に現出し続けていること。などの特徴を明らかにしている。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

当初は、日本・イギリス・フランスの絵本をイソップ寓話の狐が登場する話について比較し、それぞれの絵本の特徴を整理することを目的としていたが、この比較により、絵本の作り手である作家・画家の個性だけでなく、それぞれの国の国民性や文化の特徴、時代の特徴が見出されると共に、日本が明治期にそれらをどのように受容したのか、その後どのように変容したのかについての考察も進んだ。この成果は梅花女子大学図書館の2009年度上半期の展示や公開講座で公表し

ているところであり、それに対する評価も寄せられていて、当初の計画以上に進展していると考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

梅花女子大学図書館2009年度上半期の展示、公開講座、梅花学園生涯学習センター公開講座シリーズで公表したものを踏まえながら、研究成果を一般にも読めるような形でまとめ、報告書としたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

・高岡厚子、フランスの子ども向け雑誌に見る日本のイメージ、梅花女子大学文化表現学部紀要、査読無、3号、2006年刊、93～112頁

・加藤康子、江戸期子ども絵本の魅力（承前）一昔話の絵本化・赤本『兎手柄』の場合一、梅花女子大学文化表現学部紀要、査読無、4号、2007年刊、1～17頁

・三宅興子、「ぐりこえほん」にみる絵本意識、梅花児童文学、査読無、15号、2007年刊、1～30頁

・三宅興子、絵本研究の動向、絵本 bookend、査読無、2007年号、2007年刊、66～72頁

〔学会発表〕（計1件）

・加藤康子、江戸期の絵草紙と伝承、日本昔話学会、2008.10.11、大町文化会館

〔図書〕（計2件）

・三宅興子、翰林書房、児童文学の愉楽、2006年刊、372頁

・石澤小枝子・高岡厚子・竹田順子・中川亜沙美、大阪大学出版会、フランスの子ども絵本史、2009年刊、424頁（共同研究の成果をまとめているため分担執筆部分を示せない。）